

新緑の美しい季節となりました。
 スポフェスの練習がはじまり、お昼休みの
 メディアセンターはいつもより来館者が少なくなりました。
 静けさのなか、のんびり本を読む人、
 課題に取り組む人など、
 穏やかな時間がながれています。



■ 今月の新着図書から ■



『沖縄もの知りクイズ 394 問』分類 291
 蔵満逸司 / 南方新社

3 年生の沖縄事前学習がはじまりました。メディアセンターの窓辺でも、沖縄関連の常設展示コーナーを設けています。さて、この本は琉球大学の助教授でもある著者が、とっておきの沖縄に関するクイズを 394 問も設問しています。沖縄では当たり前だけれど、知らない世界が満載!お友達と休み時間にどうぞ。



『南極の食卓』分類 402
 渡貫淳子 / 家の光協会

南極に行くために、料理人に応募した著者の渡貫さん。南極ではごみは一切捨てられないということから、どのようにして極力ごみを出さないようにし、食事で生じる生ごみはどのように保管して持ち帰るのか、など工夫の数々には目を見張りました。観測隊員の活動を影で支える料理人たちの仕事にぜひ注



『空とラッパと小倉トースト』分類 913
 オザワ部長 / Gakken

福岡の山奥で育った美森(みもり)は転校した名古屋の川辺でたまたまトランペットを吹いている少年と出会う。転校した学校で、その少年と再会した美森は、自分も「吹奏楽部に入部する!」と思いつくが、その吹奏学部は全国的にも超有名でハイレベルな学校だったの。全国大会を目指す部で、美森ははたしてついていけるのか?!



『となりのハト』分類 645
 柴田佳秀 / 山と溪谷社

平和の象徴「ハト」。しかし公園や住宅地ではフン害から嫌われてもいます。スズメやカラスと共に私たちには身近な鳥にもかかわらず、私は注視したことがありませんでした。ハトは首を振って歩く印象でしたが、むしろ頭は静止させ、体を高速で前に進めているのだそうです。初めて知ることはばかりでした!



『時計屋探偵の冒険』分類 913
 大山誠一郎 / 実業之日本社

祖父から受けついだ時計屋で働く時乃(ときの)。話を聞いただけでアリバイを崩していく彼女の推理は今回も冴え渡ります。5 作の短編からなりませんが、なかでも同じ時刻に離れた場所でも二つの事件が起こり、どちらも同じ男が容疑者となる「二律背反のアリバイ」はなかなか面白い。シリーズ 2 作目ですが、今作からでも楽しめますよ。



『命をつなぐセラピードッグ』分類 645
 大木トオル / 講談社

日本初のセラピードッグとなった捨て犬チロリ、福島で救出された被災犬の幸(さち)など、行き場を失った犬たちは、どのようにしてセラピー犬となったのでしょうか。45 教科を 2 年以上かけて学ばないとセラピー犬にはなれないそうです。医療や介護の現場で働く犬たちのノンフィクション。

英字新聞

The New York Times weekly

が入るようになりました！

メディアセンターではこれまで英字新聞は“The Japan Times alpha”だけでしたが、4月から“The New York Times Weekly”が加わりました！

こちらの方が英語の難易度は高いので、英語アドバンスの皆さん、ぜひ閲覧ください。また、当日の新聞はすべて机の上に平置きすることにしました。一面の記事がみやすく、新聞によって同じ日でも取り上げる記事が違うことがわかりますので、読み比べにもぜひどうぞ。



▲当日の新聞は毎日平置きにしました

●今月の主な館内展示

「本屋が舞台の小説&ノンフィクション」展

今月は、本屋さんがテーマの小説とノンフィクションの本を館内入り口脇で展示しています。

今や電子書籍でも本が読める時代となり、町の小さな書店がどんどん姿を消しています。私が子どもの頃、駅前には3軒ほど本屋さんがあり、気軽に立ち寄っていました。今ではいずれもなくなってしまい、大型書店しか生き残れない時代となってきたことを少し寂しく思います。

でも小説のテーマとしては、「本屋さん」や「古本屋」が舞台のミステリーや恋愛ものなどは色々あります。ぜひ本屋さんでテーマの本を読んで、たまに近くの本屋さんにも足を運んでみてはいかがでしょうか。



『金曜日の本屋さん』名取佐和子 角川春樹事務所

『平台がおまちかね』大崎梢 創元社

『ミュゲ書房』伊藤調 角川書店

『ペナンブラ氏の24時間』ロビン・スローン 創元社

『書店主フィクサーのものがたり』ガブリエル・ゼヴィン 早川書房

『奇跡の本屋をつくりたい』久住邦晴 ミシマ社

など、このほか多数！

本棚 五月の上旬に、卒業生が「有休がとれたので」と学校を訪れ、メディアセンターにも顔を出してくれました。すでに社会人として多忙にもかかわらず、貴重な休暇に母校を訪問しようと思ってくれたことが嬉しく、懐かしい昔話に花が咲きました。話のなかで今度同級生同士の結婚式に参列すると聞き、急きよ二人にあてたお祝いのメッセージカードを書き渡してもらったことにしました。すると後日、そのカードを手にした新郎新婦の画像が送られてきたのです。満面の笑顔にこちらまで幸せを分けてもらったような心あたりました。中高生だった頃の面影もあり、教育現場の図書館で働いていて本当に良かったです（渡邊）